エリヤの霊とイエスの霊

列王記下　２：１－１５

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 7 月 28 日
聖霊降臨後第 10 主日

京都聖三一教会にて

預言者エリヤはエリシャを自分の後継者と定めて、半強制的にエリシャを呼び寄せました。エリシャは決意してエリヤに従いました。エリシャは先生であるエリヤから多くのことを学びましたが、まだとても預言者として自立するどころではない。エリシャは自分の力のなさを強く感じていました。けれどもエリヤは年老いて、ついに別れの時が来ました。それが今日の旧約聖書です。

時は紀元前 9 世紀、北王国イスラエルはアハブ王の治世でした。アハブ王は軍事力と富と権力を拡大し、イスラエルは繁栄を誇るかに見えました。しかし事実は、潤っているのは一部の貴族と金持ち。多くの人々は重税と労働と戦争に苦しめられていました。神に対する真実の信仰は衰退し、道徳的退廃が生じました。エリヤはこのような時代に、イスラエルに信仰と正義を回復しようとして、命がけで働き戦ってきました。しかしもう地上の命は尽きようとしている。自分の後を、何としても若者エリシャに託したいのです。

今日の旧約聖書の初めのほうを読んでみましょう。

「主が嵐を起こしてエリヤを天に上げられたときのことである。エリヤはエリシャを連れてギルガルを出た。エリヤはエリシャに、『主はわたしをベテルにまでお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい』と言った。しかしエリシ

ャは、『主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません』と答えたので、二人はベテルに下って行った。ベテルの預言者の仲間たちがエリシャのもとに出て来て、『主が今日、あなたの主人をあなたから取り去ろうとなさっているのを知っていますか』と問うと、エリシャは、『わたしも知っています。黙っていてください』と答えた。」列王記下 2:1-3

ギルガルからベテルへ、ベテルからエリコへ、エリコからヨルダンへと、二人は進んで行きます。エリシャはエリヤから絶対に離れたくない。エリヤを去らせまいとして、どこまでも一緒に従って行ったのです。

エリヤはここに至って、できることなら自分に与えられている神の力（神の霊）をエリシャに与えたいと切に願いました。エリヤは言いました。

「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」2:9

エリシャは言いました。

「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください。」

エリヤがしてきたような神のわざは、学びと経験を重ねてできるものではない。神の霊が必要なのです。「二つの分」とは、正式の後継者として授かる分という意味です。エリヤに働く神の霊を受け継がせてほしい。はっきりとエリシャは求めました。

「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」2:10

神がエリヤを取り去られる現場を目撃できれば、願いは叶えられる、というのです。

彼らが話しながら歩き続けていると、突然、火の戦車が火の馬に引かれて現れて、二人の間を分けました。エリヤは嵐の中を天に上って行きました。**エリシャはこれを見て**、エリヤの名を必死に呼びましたが、もうエリヤは見えませんでした。エリシャは自分の衣をつかんで二つに引き裂きました（2:10-12）。悲しみと落胆で、彼の心は破れました。エリヤを失い、自分は無力なまま取り残された。しかし彼は、神がエリヤを取り去られる現場を見たのでした。

天から外套が落ちてきました。エリヤの外套です。この外套には重要な記憶があります。エリシャが初めてエリヤに出会った時のこと。エリシャが牛を使って畑を耕していたとき、突然、エリヤが近づいて来てこの外套をエリシャに投げかけた。お前を捕まえた、という意味だったのでしょうか。その時から、エリシャはエリヤに従ったのでした（列王記上 17:19-21）。

エリシャは天から落ちて来たその外套を拾って、ヨルダン川の岸辺まで引き返してきました。その外套で彼は川の水を打ち、

「エリヤの神、主はどこにおられますか」と言いました。すると、ヨルダン川の水は左右に分かれて、彼は渡ることができた、と書かれています（2:13-14）。エリヤの神、主はエリシャとともにおられるのです。

エリコまで戻って来ると、エリコの預言者の仲間たちはエリシャを見て、**「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」**と言い、彼を迎えに行って、その前で地にひれ伏しました（2:13-15）。

エリヤの霊。単に人間エリヤの霊ではありません。エリヤに臨みエリヤとともに働いてエリヤと一体となっていた霊、神の霊が、今、エリシャの上にとどまっている。エリシャはこうして、エリヤを継承する預言者とされたのでした。

それから 800 年ほどして、イエスがお生まれになりました。イエスが洗礼を受けられたとき、天が裂けて神の霊が降ってきてイエスにとどまった、と福音書には記されています（マルコ1:10）。

イエスはこの世界に神の国を実現するために、弟子たちを集められました。弟子たちはイエスに従って多くのことを学び、経験しました。けれども学びと経験をいくら重ねても、イエスの働きを継承するためには十分ではありません。イエスの霊を、イエスに働く神の霊を受けることが必要なのです。

ところでエリコの預言者仲間は**「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている」**と言いました。それなら**「イエスの霊がわたしたちの上にとどまっている」**と言ったらどうでしょうか。意外に聞こえるかもしれませんが、けっして根拠のないことではないのです。

パウロはガラテヤの信徒への手紙の中でこう言っています。

「あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。」ガラテヤ 3:26

これは最初の弟子たちだけのことではありません。わたしたちのことなのです。わたしたちはエリヤの外套以上のもの、キリストそのものを着せていただいた、あるいはいただくのです。身を守る、温かい服。同時に働きやすい服です。キリストが私たちを包んで、キリストがわたしたちの中で、私たちをとおして生きてくださる。キリストを着たというのは、言い換えると、イエス・キリストの霊を受けた、ということです。

「イエスの霊がわたしたちのうちにとどまっている」。

そうありたい。すでにそうなのですから、そのように生きたいと願います。

今日の福音書は夜のガリラヤ湖でした。闇の中で逆風に漕ぎ悩む弟子たちに、海を渡って近づいて来る人影。弟子たちは恐怖にかられました。しかしそれはイエスだったのです。イエスは弟子たちに言われました。

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」マルコ 6:50

イエスはわたしたちにもそう言われます。すでにわたしたちに与えられているイエスの霊が、この声をわたしたちのうちに、生涯何度も何度も響かせてくださいます。

「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」マルコ 6:50

イエスの言葉と霊によって励まされつつ、わたしたちはイエスの願われた神の国を広げるために、イエスに従って歩んでいきます。

祈ります。

主イエスさま、あなたはあなたの霊をわたしたちに与えてくださいました。そのことを忘れてしばしば恐れや失望に捕らえられることをお赦しください。どうかわたしたちのうちにいただいたあなたの霊が、力強く働いてください。わたしたちの心の恐れと不安を静め、たとえささやかであっても、あなたに従って神の国を広める歩みをなさせてください。アーメン